

「納税」という名の優しさ

福岡市立春吉中学校 3年

内海 璃子

私の妹は小学六年生で、ミュージカル俳優になるという大きな夢に向かって、毎日レッスンや自主練習に励んでいる。鏡の前で、心の底から楽しそうに踊る姿は、私の自慢だ。そして、そのそばで彼女の夢を支えるのは耳についた小さな機械である。妹は、十万人に一人と言われる「両耳外耳道閉鎖症」という障害を持ち、音が聞こえにくい状態で生まれた。私たちが当たり前に聞いている音が、生まれてすぐの妹にはほとんど届かない状態だったのだ。当時三歳だった私には、そのことがはっきりと理解できたわけではなかったが、今までとは様子の違う両親の姿から、幼いながらに状況を感じ取り、不安を覚えた。

そんな中、妹が生後六ヶ月の時、私たち家族に希望の光が差した。それは、骨の振動で音を伝える「骨伝導補聴器」だ。この機械を装着すれば健常者と何ら遜色なく音を聞き取り、発語ができるようになるのである。初めて鮮明な音を聞いた妹の輝いた目は、私たち家族の記憶に強く残っている。それから、妹はあらゆる音を吸収し、三歳でクラシックバレエを習い、小学校三年生でミュージカルを始め、今では劇団に所属して自分の思うままに歌い、踊ることを楽しんでいる。

ただ、妹の夢を支えるこの補聴器は非常に高価で、私たち家族だけでは到底手が届かないものだった。それを支えてくれたのが、国からの助成金制度だ。そして、そのお金が国民の皆さんが納めた「税金」だと知った時、私ははっとした。教科書の中の文字でしかなく、買い物のたびに少し鬱陶しいとさえ思っていた税金。そんな税金が急に身近なものに感じられたのだ。顔も名前も知らない誰かの真面目な労働と誠実な納税が、巡り巡って私の妹という一人の少女の笑顔を作り、未来を育んでいる。そう気づいた瞬間、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

この気づきをきっかけに、私は自分の周りを見渡した。毎日通う中学校の校舎、新しい教科書、帰り道を照らす街灯。当たり前だと思っていた日常は、多くの税金のおかげで成り立っていたのだと気づいた、私たちは社会からたくさんのものを与えられ、生かされている。そして大人になった時、納税という形で社会に恩返しをしていくのだ。その循環こそが、この社会を動かしていくのだと知った。

妹を支えてくれる税金は、見知らぬ誰かの「納税」という名の優しさだ。その優しさを受け取った妹は、いつか舞台の上から、たくさんの人々に感動や勇気を与えることで、その恩を返していくのだと思う。

納税はただの義務ではない。それは、誰かの夢を応援し、未来への希望をつなぐためのエールだ。私もいつかこの社会の一員として、誰かの背中をそっと押してあげられる大人になりたい。妹の輝く笑顔が、この社会の優しさに守られていることに心から感謝しながら、私はその日を心待ちにしている。